読書通信

No. 122

1　イラク、シリアから各地に飛び火するＩＳ（イスラーム国）によるテロおよび戦闘は従来の宗教戦争や民族抗争とは趣がまるで違う。愚直に戦う集団というより得体の知れない恐れを感じてしまう。欧米も永く手を焼くだろうし、日本などとても相手にならないのではないか。

池内恵『イスラーム国の衝撃』（文春新書、８４２円）は国境なきＩＳの根本思想、資金源、広報戦術など詳細に解説していて組織の実態もよくわかる。「プロパガンダ映像の表現と趣向は実に多彩である」とされるメディア戦略のレベルの高さは、今後もＩＳが世界の世論操縦で主導権を握っていく可能性を示唆する。「指導者なきジハード」により、支配地に馳せ参じなくとも世界中で終わりなきテロ行為を続けていく共鳴者が続出する恐怖にどう対処すればよいのか。力で抑え込むことは逆効果かもしれない。後藤健二さんらの事件は刊行直後で言及はない。

2　ＩＳとアメリカの独善とどちらが危険か。人によっては激高しそうな設問だが、善意という石が敷き詰められた道の先に何が待ち受けるかはしばしば歴史の教訓となっている（はず）。

森本あんり『反知性主義』（新潮選書、１４０４円）は書名から硬い本かと心配したが杞憂だった。キリスト教が異常なくらい盛んなアメリカとは、単に宗教心が厚い国というだけのことではない。カソリックでもプロテスタントでもない変質したキリスト教がどのような国を生み出しているのかが、説教師、大衆社会、映画など多彩な事実を援用しながら解き明かされる。進化論を否定し紅海が真っ二つに割れたと信じる億を超える人たちの頭の中はどうなっているのか。それが政治をどう規定しているのか。生きたアメリカ史を学んだ気分になる。アメリカに興味が少しでもある人には好個の書だ。

3　**加藤恭子編『日本人のここがカッコイイ！』**（文春新書、８４２円）では日本に永くかかわってきた外国人36人が率直に日本観を語っている。賞賛も批判もご自由にという編集スタンスだが、結果的には日本に感心し、驚き、同感していく内容が多い。ちょっといい話や逆に反省させられる話もあり、国籍、年齢、職業が散らばっていてそれぞれ個性的で最後まで面白く読める。日本人としては自分たちの気がつかない感想や評価を前向きに活かしていくことが大事なことは当然で、読み捨ててしまうのではもったいない。「インタビュアー雑感」みたいなものを数行ずつ載せたら面白かったろう。

4　**谷口ジロー『千年の翼、百年の夢』**（小学館、２１６０円）はルーブル美術館との共同制作が生んだ日本漫画の秀作だ。『ふらり。』や『坊っちゃん』の時代』の作者ならではのゆったりした展開と筆致によって、名画の世界が夢と現（うつつ）の中で蘇（よみがえ）る。落ち着いた色彩によりコローやゴッホ、ニケの像など漫画がここまで表出するとは。街並みや森や畑の描写もすばらしい。

（純）